

石塚大工と造って

「砂で造った龍が鳴く」

第四回

間瀬の——母なる地、能登——に本誓寺を建立した棟梁、篠原嘉左衛門(副重)には弟がいました。彼はモンカンニヤの基助と呼ばれていました。

一門の人々は、何を聞いても長男を立て、次男である基助をないがしろにする風潮でした。

この兄弟は幼い頃、高屋の浜に砂を盛り上げ彫刻を競い合って遊んだと口伝えされています。(田中高蔵談話) 兄の彫刻は相伝的に見覚えたことを忠実に精緻に彫りました。

弟の基助はおおらかで大胆な手法で題材もワクを超えた大胆さでありました。彼の造った龍の背中をさするとキューキューと鳴き声を出し、周りの子どもたちを喜ばせました。——砂で造った龍が鳴く——そんな逸話は能登路にもありました。わたしたちは、本誓寺を幾たびか、訪れることによって事実が分かってきました。

この兄弟は、本誓寺近くの「琴が浜」の泣き砂を固め、本誓寺の彫刻の構想を練り、門徒に説明したのでしよう。この浜を歩くとキューキューと泣いてくれました。間瀬にはこの兄弟が遊んだきれいな海は今はありません。かつては高屋に泣き砂のきれいな海があつたことが分かりますね。

な海があつたことが分かりますね。吉田神社の棟梁嘉左衛門(重房)田中三右衛門(重吉)田中要蔵(宗重)は兄(副重)の子である。基助はこの三人の甥を兄に代わって厳しく仕込みました。吉田神社で彫刻の牙えをみせた、三右衛門は画一的な題材にとられない、大胆な手法で、配置も一点に集中させないで、建物全体に広がりを持たせる方法で仕上げられています。これは、叔父さんの手法を見事に生かしています。

石塚家に養子に行き、石塚基助(倚信)と名乗り、文化二年信州に健命寺の棟梁となつています。兄が能登に本誓寺棟梁など、一門の頂点として光りを浴びますが、彼は、篠原家を守ることを第一とした感が大きいです。JR飯山線、野沢温泉村、標高六〇〇メートル、一月の平均気温零下六度という厳しい気候と風土の地に曹洞宗の名刹健命寺があります。豪雪地だけに、こじんまりと建立されています。

桁行(正面十間、十八尺)奥行きも同じ長さ位の正方形で、種月寺と同じ寄棟造り、絵かやぶき屋根です。寄棟は四方からの風などの圧力に強い構造です。専門用語で構造を記述してみま

しよう。柱は角柱、差鴨居(さしかもい)の上に三段の貫(ぬき)を入れ頭貫(かしらぬき)、台輪(たいわ)でかためています。組物は出組で支輪をつける。中備(なかざし)は本蛙又(かえるまた)とする。軒は二軒扇垂

近付くと花が咲く彫刻です。遠近によって彫刻模様が変化するところが特徴です。形式にとられない、自由奔放で追隨を許さない技量を駆使し、小ぶりなお堂の広大さを演出するために天井を高くし、空間を大きくしています。



若中社会科クラブも参加しての生涯学習講座(健命寺)

刻は狂巻です。彼は須弥壇にも、手をいれました木肌を生かした彫刻を施し、釘は一本も用いず、質実剛健で気品を漂わせています。見事なほど本堂と一体化し溶けこんでいて、寺院間では垂涎の逸品と評価されています。

わたし達はこの寺の周辺の村々に——間瀬大工の神社がある。——そんなウワサを聞き、訪れることが度々ありました。境内に佇むとき、確かに間瀬大工の建築感がありますが、近付くと満足できる技量ではありませんでした。

石塚基助の独創的な原点は、読み取れませんが、完成した技とは言えない不思議な建造物が五指に余りました。棟札に信州宮川沖吉と墨書されていました。

ナゾが解けました。能生の明了寺(棟梁篠原熊三郎)の棟札にある宮川宇吉と同一人物でした。篠原家の弟子であつたのです。宮川沖(宇)吉の彫刻は確かに、伝統的な篠原家の彫りの技を基本にしています。

特に基助の手法である独創性があります。しかしあまりにも独創性に走り、奇抜性しか感じない面が多々あり、残念に思います。信州から間瀬の地に弟子入りするほどに、この地方に立つ基助彫刻の健命寺は近郷に知れわたつていたのでしよう。(若室村生涯学習推進本部)